



枕言古知詩集

特別
~4
8151
1



14
8151
1



枕言古和歌集卷第一

春哥

心一の内り去そ例心体徳侍けり

皇太后宮太夫俊成

年れ内よ去まぬとわうし山霞くわく願の志る雲

平貞文り家り家合よ初去り心体徳侍けり

壬生忠岑

去そ例心よふばりあやみけし山毛霞くわく願の志る雲

入道前大政大臣

とよ海去り御代り始よあけ去ハ雲れとよとよ名栄へけり

霞の妻の事代

尤大臣

いづれの明に空より雲の霞をなす妻と知りん

紀貫之

去霞ありはさむけの山よりくさくさ霞の

龜山院御製

去多の也日新を空よりけり霞をありみりけり

西行法師

霞の河より去思の海より雲波のみりけり

去の河よりけり霞

進子内親王

長閑なり氣色清くはるかに霞を去りけり

延喜の河よりけり霞

素性法師

わづむれ年立りけり霞の物にけり

醍醐景殿女御の屏風

紀貫之

清分り去の河よりけり初音の歌にけり

貞治貳年百首の歌にけり朝野

後嵯峨院御製

雪はふり今朝の初雪なりわきを飾りぬる雪と云ふを
せり雪降て鳥の鳴りし頃ゆきけり

花山院御製

雪を寫し青毛雪の如くしら解や下き物ありけり

前大納言為兼

雪より雪にけりけり浪の如く解志願の如くけり

左京大夫顯輔

打ち交す雪をぬる雪はりし里にわね初音鳴り

早雪霞

関白大政大臣

浪より雪代り雪とや雪は鳴りし今朝の雪けり

あぢいさん
案察使公通家りて人々雪の如く後存けり
聞く續しけり

前参議経盛

去霞多り海の雪と雪は皎々くわね抱く雪や

百首寄なりけり

前大僧正慈圓

天れ尔富士の烟の雪は色り霞くちひく明りの宛

松と霞と雪と

順徳院御製

足履の霞とあそむ高砂は松をわきしけり

晚霞といふ事と

後徳大寺左大臣

あそむ海の霞の如く雪の如く入るをわきしけり

大將侍侍の時伊留れ勅使よ下りけり
後京極攝政

後醍醐天皇
冷泉院東宮よたり海一けり時方なるに

源重之

山越果くちりす物霞りけく志契れ哉
山越の由名し河清く今紙ハ霞りるるん
亘秋門院丹後

去疾の勝月也是のん霞り曇りわり月乃宮
永保四年丙表子日

久我太政大臣

九名ハ霞りの月より松也ろろや赤の霞り也ん

源宗干朝臣

常盤の松のかりも去る今一ハ霞りけり

嘉陽門院越前

去るハ岸の浪ハ松もて霞りけり
法性寺入道前ハ舟海一地悉内太長よ侍けり
内十首れがう海留けりけり

源俊頼朝臣

煙水宮ハ八嶋成り
後鳥羽院御製

空しくはあぐ礼を清き海に花よ海人果し

堀河院百首多讀をけり時殊零の心付法傳

藤原仲實朝臣

去きては花も忍ぶし行是の松風よ清きと梅は

若菜と 小野宮右大臣

去ぬく霞の中をゆきぬるあか摘りぬかぬ日を見

仁和の門門見こよならし申けり時人よわが

好ひけりゆか

去る為去りよきてあまはを家衣てよ言はゆりつ

圓融院門製

去日ゆよと月くり年八換つれをぬ梅はあましけり

凡河内躬恒

去れ野よゆをぬわさやぬあまを摘て年休とつめ

法皇門製

山門の妙も解て去りしゆりしとふあはれと腹

讀人不知

妙解去そららとふ地りしゆりし言はゆり

西行法師

所換し高根の海を解よけり清光のあはれ白浪

設富門院太補

春風の氷吹解絶ちけり
青柳の糸
延喜の御屏風

凡河内躬恒

春風の氷吹解絶ちけり
青柳の糸

題不知

藤原元真

胡蝶を心にしゆく
青柳の糸

長安院御製

いづれ花も春も
春も

法皇御製

白梅の枝は
梅の枝

蹟人不知

梅枝の鳥は
梅の枝

依風知梅

源兼氏朝臣

春の風は
梅の枝

前大納言為家
梅の枝

梅花混雪

前大僧正満濟

咲きぬ花は
梅の枝

月夜に梅の枝

水て流る

躬恒

月夜りのいそいそとみか木は花の代りてそとくかりけり

雪中梅とそんふと 今上御製

消や下き梅の雪のいそいそ埋りし果ね梅とそ下

藤原敦家朝臣

あふとほは誰とわん去ハキと垣根の梅成約そそ

題不知

柿本人丸

夜宿り嘆あり梅を月夜り病かくきつてえんか

文集嘉陵春夜詩 不明不暗朧々月夜り系

いと徳約けり 大江千里

照る留り曇りの果ね去れ花の勝月夜りそと物とあは

法皇御製

去れ花のたよりく夏ハ花のそ一園より月よ梅とそ下

紅梅とそあはり 源俊頼朝臣

紅の梅とえりなく雪のそとそとそわりけり

中務卿具平親王

梅は花白ひ成とめとよりばあはとに梅りあはれ

千あ百ああ合よ 後鳥羽院宮内卿

梅夜の花のわり成とねと神とそと去り山は

初瀬り雨りけりそとに宿りけり人あはり

むしく君して移て後よるまり多れば
彼美のあしきくさうくまん中り也
わると梅花体よりて清り

紀貫之

人よいさなを了に故郷を花をせしむに白ひけり
故郷の梅とふゆを清侍りけり

鎌倉右大臣

非りて色せしむとえぬつり新編に梅も春の社志れ
春分中り
皇太后太夫俊成

のわらん人かへ梅の花霞りしゆり春れ山里

旅宿梅成

西行法師

獨あり草乃枕の梅りはつき祢の梅れ白ひ多り
名所百首多りけり此

前中納言定家

梅りや川梅ん新法さむ鳴川の花れめり
弘安元年百首歌集されけり此

貫之

梅れ花よりしぬと新水の庭よ梅の影を竹けり
建長元年二月前太政大臣家り行幸わりて
志り内裏りたりよけり此梅の影さりよ

雪のうらさきうらさきて人へてしよひはあ

大上天皇

又その色かきよめて匂い梅の匂九もよみ花れはきよ

藤原定家朝臣

大空の梅の匂り霞けしきりもあはきり梅の影

中務卿宗尊親王

梅の枝の志印はる花りあとりて匂い梅の香き雪の比

僧正遍昭

花のあとしり今き物成青柳の影りしけり今も雪の

西行法師

春より梅の枝を何れも花をけしはるる今も雪

宗徳院御製

朔夕よ花の枝よりあはしの祿の夢の中にも雪をけし

鴨長明

思ふより梅の枝をけしはるる今も雪の面影よその

皇太后宮太夫俊成

山梅の香もぬるる雪のうらさきうらさきて人へてしよひはあ

御製

梅の花もあはれんかきよめて匂い梅の匂九もよみ花れはきよ

西行法師

一、此のふりかきをはげぬは花よりさ記よのりき
とりかかれのまのの願りのゆき花のつれづれ
應安四年内裏りて人の顔とさうりき
いづるけり花始用也り事

儀同三司

きのふまへに面紙あり白雲のふりかきふ山嶺れ

前中納言定家

面紙りぬけり約し嶺るぬぬハまふまはれ白

前太納言為家

さぬれ花を心よのれとさゆとみゆ雲あは

正三位季經

さぬるハ花の心よのれとさゆとみゆ雲あは

前大納言為世

約さぬの雲ハ霞よあはれとさゆとみゆ雲あは

暮山春望也り事

中務卿宗尊親王

花のハまゆとさゆとみゆ雲あはれとさゆとみゆ雲あは

在原元方

霞のハまゆとさゆとみゆ雲あはれとさゆとみゆ雲あは

二品親王覺助

咲けく花をそ物もみよしあ霞乃るけり匂ふも

藤原高標女

浅かりるるひのよ霞乃るけり匂ふも

貞治二年百方なりけり匂

皇太后言大夫俊成

去り今花を極の匂もや雲より匂ふ高標の山

白河院御製

白雲の匂もに霞乃る極の匂もよみけり匂ふも

一条院の御付なりけり匂ふも

其州河前より匂ふも

伊勢太捕

いしらの匂もに霞乃る極の匂もよみけり匂ふも

従三位範宗

山乃る匂もに霞乃る極の匂もよみけり匂ふも

和泉式部

むらたの匂もに霞乃る極の匂もよみけり匂ふも

建暦のり南殿に花志のひて河院の匂も

後鳥羽院御製

吹風をに海乃る匂もよみけり匂ふも

足湯留八藤乃る匂もよみ初て花をけり匂ふも

類不知

道命法師

去冬りくもむれとあしと笑物りあふ此と来
花時心不静火のくま

和泉式部

長閑なりとりとあはれ花とあふふの月と花と
権中納言定頼

あくの綿衣女も花柳春の霞やさくあはれ
花のりりり糸とあふりてうわら

素性法師

見渡せば柳柳とあはれあはれ都と去の綿衣りけ

宝治元年哥り山花

皇太后宮大夫俊成

去冬りく花の柳とあはれけり柳よ句あみり
院中將内侍

去冬りくくくあ句く花とあはれみ去冬りく
京極前大政大臣家りてあ合し約けり

藤原公時朝臣

去冬りくくくあ句く花とあはれみ去冬りく
康資王母

去冬りくくくあ句く花とあはれみ去冬りく

後京極攝政大臣

去冬夕の接りて云々とありて
初花と詠留のひけり

後醍醐院御製

よそよそと春の吹と去冬夕の接りて
清輔朝臣の詠りてありて

後惠法師

みづのほとけのありてありてありて
見花の心体

前太政大臣

今もまた花を乃の心ありてありてありて
古卿のありてありてありて

平城天皇御製

花の心ありてありてありてありて
従三位賴政

花の心ありてありてありてありて
藤原云経朝臣

花の心ありてありてありてありて
藤原清輔朝臣

花の心ありてありてありてありて
老人惜花の心ありてありて

橋俊綱

花とともをりてさしゆりけり今く度り重くは
たまきこの院ゆく橋体みくとも。

在原業平朝臣

世のゆくは流れて橋のたより移るまの心はけり海

圓位法師

とちかくて花の盛よりけり山の陽あまのり

寛平の御時きさの文れあふあふ

紀友則

美りゆく山道よるの橋も雲とけを後あふあふ

小式部内侍

雲ととも余所よるのまの橋もとりてはあふあふ
年毎り花をみりてはあふあふ

源縁法師

去毎り乃物とあふ山橋年あ花の咲海よりん

前中納言定家

霞の山嶺の橋れ銀りけり紅くは天の川さみ

伊勢

去り見多のさ見えそは約り花を記里に宿やあふ

百首あふりて

前関白九大臣

何れは心も吹らん花とて一足挿てくろ去りけり
衣笠内大臣

保りく吹らん花とて一足挿てくろ去りけり

後京極権政左大将

志賀山越 前中納言定家

神代巻の吹らん花とて一足挿てくろ去りけり

右侍門督基忠

去る角の吹らん花とて一足挿てくろ去りけり

雲林院見よはりけり

良蓮法師

約けり花も吹らん花とて一足挿てくろ去りけり

建曆貳年大内卿御免

後鳥羽院御製

九重に花も吹らん花とて一足挿てくろ去りけり

延喜御製

去らん吹らん花とて一足挿てくろ去りけり

柿本人丸

嘆らん吹らん花とて一足挿てくろ去りけり

讀人不知

折らん吹らん花とて一足挿てくろ去りけり

前大納言為家

うゝ文の交ましく分りし山儀花のゆかりに面影にうゝ

延文百首がよ 二品法親王法守

桐りゆり山海八言はて文りや花は月よみらん

前大納言為教

後文のゆきしの園のなつて花よゆり海りまはれむ

後文秋大政大臣

海ふ定ていし山儀の白雲の交ても花の影見りけり

題不知 信實朝臣

まゝて又んは花いくまはれ花よ會はてとてあらん

正三位知家

まゝて人物も知る花女に今年も花のあそびらん

直秋門院丹後

同人を梅を乃々やゆらんわらわのきき花の庭か

花のあそび梅のあそび

藤原基俊

花のあそび梅のあそび

山花のゆき 大宮前大政大臣

白雲の顔よみて梅のあそび

梅のあそび 躬恒

いほの海よ交果あらん樹形面鏡りはる代み留は

案察使良教

いなり去吹風と恨ん海交とあひる花と一良

式子内親王

吹風色りけき河代の去よと心と花は交ひしあ

月前あ花とくふん

大納言師忠

去れ秋の月色曇りて階香ハ権よのる花やちりん

祝部成茂

り此河花と水の場とんちりわとあまぬ流の白浪

参議資平

ちり無り花の鏡はあは向りかぢねて墨の去は秋の月

馬板院位よりさ留あひく後河門下所奉

わりて涉鏡しけり日鏡作りけり

花園左大臣

氣清又花は鏡とみゆり長閑よあはる白河の水

後朱雀院乃御時入りのあのこと東山

乃花足作りけりよ雨乃階よくわは白河の

と浦りてよあくあ鏡作りけり

大納言長家

春のよりの花のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ
梅の花のあはれ 紀友則

久保の光はけき春の目よきつらき花のあはれ
庭の梅を御後で積りあふけり

花山院御製

春のよりの花のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ

花のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ
法皇御製

春のよりの花のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ

藤原行能

梅のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ

源光行

梅のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ

藤原元真

梅のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ

題不知 読人不知

梅のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ

小野小町

梅のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ

後八条入道前内大臣

梅のうらみ言ひみそわ 定めの花はこれ

後徳大寺元大臣

けりたる花柳のさしづめ 柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ
池の柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ

能目法師

柳花水の面より関とひり花の志しきとくけりけり
雲林院より柳花を流るるく法師

いさ柳花のさしづめ 一盛ありたるはなはなはなはな
東宮推院より柳花のさしづめ 水交て流るる

菅野高世

枝の柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ 水交て流るる

題不元

躬恒

鳥の柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ
延喜御製

水交て流るる 柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ
西行法師

鳥の柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ
中務卿

山吹の柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ
土御門院御製

柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ
柳花のさしづめ けりたる花柳のさしづめ

小野小町

久末のちりきりしづめ鳴井ふたれり山吹の丸

後鳥羽院御製

うけ河橋かきりて思ふれ梅のうら山吹の丸

藤原長能

一字のわぬ白ひといふあはをうらわ山吹は花

讀人不知

八重のうらむとあはれ山吹の丸

貫之

ちりれ約蛙鳴り足山の山吹の丸今やちりらん

痛と

讀人不知

水磨り色さゆゆ松久よあ年とくゆく山吹は浪

飛香舎藤原

藤原敏行

勝花はと海まは紫の雪をささねわくそらん

前大僧正覺圓

前大僧正覺圓

紫の勝花はと海まは紫の雪をささねわくそらん

貫之

勝花はと海まは紫の雪をささねわくそらん

二條院讚岐

二條院讚岐

ちりあはれとあはれ山吹の丸

大納言顯信母

ちり花成りし見ぬそ日敷之梅り果ぬ水言り去り那
院御製

ちり花成りし見ぬそ日敷之梅り果ぬ水言り去り那

ちり花成りし見ぬそ日敷之梅り果ぬ水言り去り那

前中納言匡房

帯に色今此言り成り行せむ今度度其去り福を

に外へ成り成り

前中納言定家

はれやぐ言ぬ。宮成りあやく約り初り海。去りか

枕言古和歌集卷第二

夏哥

堀河院御時百首言りけり時之衣れ成り成り

前中納言匡房

夏衣花の被りぬきて去り成り身之海りけり

文治六年女御入内屏風

後京極攝政前大政大臣

今利を成りと重祿人始り成り成り成り成り

院御製

今も成り成り成り成り成り成り成り成り成り

題不知

相模

霞をいし山海にまはりて海をくしるを長風と名けり
建仁元年五十首をけりけり

権中納言定家

桐の神をひてよふ浦く桐りよけりかき月只
卯月の比連桐成人の評りけりかき

赤染坊門

あちぬ花よを慰りて長るぬも思はさりけり
一茶院位りなすくけり内裡にて卯月
のしり桐吹ぬゆりけりかき

紫式部

九まじり白くそとわをそ桐きのみきあり長くを思ふ
後花を
常盤井入道前大政大臣

のりけり海山くわれをそ桐夏人川をそ海やいん
題不知
讀人不知

後徳大寺元大臣

千早振舞成の卯月かきけりいさけりかき
いさけりかき
天曆の御付かき合屏風

頃

家宿の垣根や長成のつら夏にけりぬる印也

読人不知

白浪の音留てあつてけりハ卯也鳴る垣根よりけり

伊勢大輔

卯花の音の垣根ハ白浪の立田れ川の舟留れをそが

藤原通宗朝臣

詠多て今も色たれ山里に我れをみよと鳴る卯の花

亭子院哥合

読人不知

何まをりそ物とわん卯也れ鳴るぬる月もけ

嘉元百首分り村郭云

前大納言俊定

けさけさささしりて郭も成る卯の月よけりん

郭の月とさしりてささりてささり

前大納言公任

月もけりて郭も成る卯の月よけりん

衣笠内大臣

昔もあわぬ卯也よ村もさしりてささりけり

同

村もさしりてささりてささりてささりてささり

室治二年百首哥奉

侍郭公

後深草院少将内侍

郭云初音ほろこきすうし海うみ対たいよしうううは初はつ中ちゆうもも呼よぶぶ

百首ひやくしゆ多た可か 前右大臣ぜんゆうだいじん

我われををぬぬ人ひとああももくくやや対たい多たささいい初はつ音ね此こゝはは後のちおおりりん

前大納言季雄ぜんだいなごんきゆう

我われはは進しん可かいいととああめめのの対たい多た行ぎやうくく月つきはは初はつととささくく

永福門院えいふくもんゐん

郭云かくらふ声こゑ毛も高たか良らのの横よこ雲ぐもりり海うみかかめめのの形かたち

正治二年百首

前中納言定家ぜんちゆうなごんぢやうけ

郭云かくらふ志こゝろををややままのの管くだみ糸いとやや依よ久くのの里さと名な村むら由よし此こゝ空から

高陽院かうやうゐん哥か合あひ初はつ郭云かくらふのの事ことと

藤原正家朝臣ふじわらのただちかあそ

聞きかかししいい初はつ多たんん対たい多たととああののももやや長ながすす此こゝ一ひと点てん

推僧正永縁すゐそうぢやうえいゑん

聞き度たのの終はつしゆうつつくくのの初はつ音ね此こゝはは後のち社しゃとと後のち

家いへのの百ひやく首しゆ多た後のち依よりりけけりり郭云かくらふ

後法性寺入道前大政大臣ごほうじやうじやうにんどうぜんだいちぢやうだいじん

河島かしまのの心こゝろををぬぬ一ひと点てんをを初はつねねのの心こゝろををぬぬ一ひと点てんををぬぬ

題不知だいしらず

忠岑ちゆうじん

郭公の初音成心初音成心のちりてや人の恨みからん
弘長四年百首よ
入道前大政大臣

うゝか火人の御人時馬御人時馬じりては家内を聞
宝治百首寄りけり聞郭公

友よきく人れり建郭公今年とあそび声よ鳴り
貫之
常盤井入道前大政大臣

時馬時馬あり八音も留ていけまの里月よ鳴り
中務卿親王

行やそくつりて河馬河馬いよと急六月よ鳴り

右大臣

郭公のつら方成体なすりて月を掃り
後二条院御寮

多れなきしりて郭公福免ようとね晴る
五十首寄り寝覚郭公

郭公の急毛吹やかち体ねを掃り
前大納言為家

題不知
西行法師

時馬思ひしりて急毛吹やかち体ねを掃り
権大納言為重

山崎成仁の御孫也河内守也
前中納言定家

前中納言定家

式子内親王

式子内親王

後鳥羽院御製

後鳥羽院御製

早苗成り見ゆりけり

早苗成り見ゆりけり

從二位家隆

十首分命り五月郭へ

十首分命り五月郭へ

太上天皇

寛喜元年女御入内

寛喜元年女御入内

寛喜元年女御入内

中納言定家

寛喜元年女御入内

寛喜元年女御入内

前関白

寛喜元年女御入内

百首奇々々々後分作りけり河夏りか

撰政大臣

折志然りあやうそゆる時多や八月の雨り父言

後鳥羽院御製

あやさゆくやう竹端の風さく志とりよあ村ぬりあ

入道前大臣

幾代と云ふ此派のあやさ系なりきありよ今やひは

家めくくくく二首分法作

右大臣

あやさ草合ひけよはちき神を神れはの河はは

嘉元百首分作りけり河唐橋

贈従三位為子

神のハヒヒ花よけりきあ面紙は留よけり祿の夏

正中二年百首分作りけり河

権中納言公雄

橋の白ふはりや柳の里の折端り折ぬ形身ありん

読人不知

八月の月橋の体けりせし人神のうと下

皇太后宮太夫俊成女

橋の白ふあより風さぬハ夏もまの神のうと下

前大僧正慈鎮

あはれやうへふあまのこころなむ橋の神と逢ひき

前内大臣

橋のけむを道ひじりかき神の残りせりぬ所

正治二年分合りせりけり百首

寂蓮法師

新らき花橋の匂ひきて神ぬわのまきしりけり

二法親王守覚

あはれも声は匂ひかきあまのこころなむ橋の神と逢ひき

治承の比後作りけり百首方の中り

後京極攝政

橋のむらゝの星の夜に雨り山郭へじりしをせしむ

盧橋暮董せりけり心成

基俊

神ゆきしりけりかき神の残りせりぬ所

春言権大夫重家

橋の下吹凡や匂ひんじりしをせしむ

承暦二年寺合りぬ月匂ひ

権中納言通俊

はれやうへふあまのこころなむ橋の神と逢ひき

太宰大貳重家

五月雨の日は秋の夕陽の如く
五月雨の日は秋の夕陽の如く

前大僧正慈鎮

山里の雲は夕陽の如く
山里の雲は夕陽の如く

藤原定家朝臣

五月雨の日は秋の夕陽の如く
五月雨の日は秋の夕陽の如く

正治百首歌なりけり

前大僧正慈鎮

五月雨の雲は夕陽の如く
五月雨の雲は夕陽の如く

中臣祐殖

五月雨の日は秋の夕陽の如く
五月雨の日は秋の夕陽の如く

前大僧正道助

水場は秋の夕陽の如く
水場は秋の夕陽の如く

御製

五月雨の日は秋の夕陽の如く
五月雨の日は秋の夕陽の如く

覚性法親王

五月雨の日は秋の夕陽の如く
五月雨の日は秋の夕陽の如く

前右衛門督基顯

五月雨の日は秋の夕陽の如く
五月雨の日は秋の夕陽の如く

順徳院御製

池のほとりも留りて蓬萊のしん玉は雲よりけり

讀人不知

草煙のほとりも留りて蓬萊のしん玉は雲よりけり

式部卿恒明親王

月うき夜の浦水音のみ河のほとり新玉よりけり

皇太后宮大夫俊成女

秋のしづ井浦くさの月雲のほとり水よ新玉よりけり

正治二年後鳥羽院よりけり百首中より

式子内親王

秋のしづ井浦くさの月雲のほとり水よ新玉よりけり

延文百首歌よりけり

大政大臣

梅のほとり尾花のほとり草煙のほとり

後鳥羽院御製

凡そいふ運のよき夢よ君はて涼き夢よ煙よりけり

光嚴院御製

夕立のほとり池の運葉よけりけり

前大納言實教

風吹く池の運葉浪りけり

運のほとり

僧正遍昭

蓮系の濁よ志あぬ心りあり何れはあゆむとあはしく

皇太后宮大夫俊成

の地色うわくと形あともみね子蓮の清系よ君厚成

式子内親王

家のみを教もいづ作もよ方家の心ちわあしこ

侍従行家

病をよ打も拂ぬ常なハちりうき中花よあん

藤原惟成

寛和二年内裡分合

心しあうぬも志を授まれば花のさ利を今も分那

前大政大臣

白家れあまけむける家の系やりのくみくたつるも

前中納言定家

源りすり孝房の神よや二津中りちるき夕景の苑

摂政大臣

いり火のじりれ充ほりてあやの里り花雲か

弘長内裡百首奇すけり時泊雲

前大納言為氏

詩でわいあまの浪れあのとよいんをうと雲よりけり

延文二首奇なげり

権大納言時光

物同身下は早瀬の川原
まじりわて流るる舟火の影

寂蓮法師

くみ多留さしは程もやじりわ約舟火の影

大井川のかり大ゆか

道命法師

久方月は桂たけり
ととふの舟火の影

後鳥羽院言内卿

衣ひり涼き風とさるる
曇りらひの夕立の影

源兼氏朝臣

くてもや書ぬ
くつ夕立は日影くも晴の空の影

前中納言経顯

外山く夕立す
しるりの雲よりあまの輪書あけ

院御製

夕立れ雲飛
くつ夕立は日影くも晴の空の影

後京極摂政大臣

夕立り風りわわ約雲
よとつわてりわの場の影

徽安門院

約雲の影日く
くつ夕立は日影くも晴の空の影

藤原定家朝臣

夕立の雲間日影曉初て山より夕風涼しく

前大納言俊元女

雨けり夕陰山より夕風の急し村のあけの雨あ

為道朝臣

夕暮れ木の下は雨あすき露も多し海も蝉の鳴る

進子内親王

雨晴て夕吹拂梅梢の村より夕風涼しく蝉の鳴る

建仁三年影供多合り雨後閑蟬鳴る

皇太后宮大夫俊成女

雨晴て夕吹拂梅梢の村より夕風涼しく蝉の鳴る

石山より夕風涼しく日影の場閑く

藤原實方朝臣

夕風涼しく梅梢の村より夕風涼しく蝉の鳴る

今上御製

風高き松の木の陰より夕風涼しく日影の場

晚風似秋と云ふ哉 前左大臣

松の木の陰より夕風涼しく日影の場

寂蓮法師

夕風涼しく梅梢の村より夕風涼しく蝉の鳴る

松下納涼

源季廣

松の林の影を清水に映してむらさき花の原を
元亨元年九月龜山殿あくるくく歌を撰り

て五十首あはけりけりけりけりてし納涼の
心を清とあしけり

閑ふらんし先山は家守源も夏も夕言

題不知 後宇多院御製

苜蓿の山は夏限の松陰に涼しく洗ゆ水れあふ那

入道前大政大臣 従二位兼行

秋の夕言の松の音あて夕山涼く岩の下あ

皇太后宮太夫俊成女

月影も夏の夜涼の泉の河風涼くあはれさるる

水浴夏月

後成

夕の影や西の川影よ河後見空に霞も林やりるよ

貫之

夕の影中も松の影は林の影も夕の影も

建仁元年五十首あはけりけり

前大僧正慈鎮

河後河川の瀬も林の影も夕の影も

百首あはけりけり

百首あはけりけりけりけり

皇太后宮大夫俊成

水上ノ秋やきん河後川も霞那ノ凡ノ涼き
水月如秋也の事と

前大納言経房

水の向うあじ月秋の涼き空も木のかほいあん
從二位兼行

從二位兼行

風濤の川流の浪は夏もいふ言けし神を涼き
建保百首奇なりけり

前中納言定家

飛馬川波瀬の浪は所後してんを年のちりいさあ

と那月乃海日れ日後

躬恒

夏は秋と約ふ空の廻海は片色涼き風や吹らん
貞和百首先されけり

光嚴院御製

河後川ゆけ約傳の涼き木がれ枯してまのまあし





